

芸術的表現手段としての不道徳

不道徳主義を支持する試み

栗楨(北海道大学 哲学倫理学研究室博士課程)

芸術作品における道徳と美の関連性に関する研究は、作品の道徳的メリットが美的メリットになると主張する穏健な道徳主義(Moderate Moralism)と倫理主義(Ethicism)、「それに反対する立場として」作品の不道徳(Immorality)が作品の美的メリットになると主張する不道徳主義(Immoralism)、そして作品の道徳性と美の間の関連性を否定する自律主義(Autonomism)、と三つの立場に分けることができる。近年の分析美学領域内で、論争の焦点になされているのは作品が不道徳的なものであることは作品の美的/芸術的メリットになるのかという問題、すなわち、不道徳主義が成立するのかという問題である。

かつて、不道徳主義を支持するために、Matthew Kieran が Valuable Perspective Argument(VPA)を提出した。VPAによると、不道徳的な作品は人々の道徳的認識を一層深くする機能をもつゆえ、作品の認識的価値になる(Cognitive Value)。そして、美的認知主義(Aesthetic Cognitivism)の立場によれば、作品の認識的価値は美的メリットになる。したがって、作品が不道徳的なものであることは認識的価値の増加によって、作品の美的メリットになる。この論証は残念ながら、不道徳主義を証明するには不十分である。同じ論証は作品が不道徳的なものであることだけではなく、作品の道徳的メリットにも適応できる。何故なら、VPA が実際に依拠しているのは認識的側面の道徳的メリットである。すなわち、VPA が最終的に不道徳主義ではなく、道徳主義を支持する論証になる。

Kieran の後継者として、近年 A・W・Eaton、Ted Nannicelli と Scott Woodcock はそれぞれ自分の不道徳主義を支持する論証を提出した。本発表は主に二つの部分で構成されている。まず、近年発表されたこの三つの不道徳主義を支持する論証を紹介し、それらの内に存在する問題点を指摘する。彼らの論証は何故失敗するのかに関する自分の考えを論述する。つづいて、Panoë Paris による「不道徳主義は不道徳と美的メリットの間に弱い連結しか作らない」という主張に応じて、私は一種新しい「不道徳は美的メリットと強く連結する論証」を提出する。

Eaton は彼女の論文「Robust Immoralism」で、作品が道徳的に悪い主人公を魅力的なキャラクターとして表現し、作品の鑑賞者にこのような主人公に対する肯定的な反応を要求することは、作品にとって道徳的欠陥になる、と主張する。さらに、Eaton によると、二つの理由でこのような道徳的欠陥は作品の美的メリットになる。一つ目は、道徳的悪と魅力を同時に有する主人公は鑑賞者の心の中に感情的なアンビバレンスを引き起こすことによって、作品がさらに compelling になる。Compelling になることは作品にとって美的メリットである。二つ目は、鑑賞者たちがキャラクターの不道徳さによってもたらされる嫌悪感を乗り越えてキャラクターを好きになることは、作品にとって難しいタスクであるゆえ、それを達成することは作品にとって美的メリットになる。Noel Carrol と Eaton はこの論述について争論したが、Eaton の Carrol の反論に対する応答は成り立たないと、私は思っている。Eaton によると、Carrol の反論は矛盾している。Carrol は我々がキャラクターにある良い特質を肯定しながら、キャラクターの

道徳的悪を称賛しない、と主張していると同時に、我々はしばしばキャラクターの非道徳的な(non-ethical)良い特質でキャラクターの道徳的悪さを最小化する傾向をもっていることを、認める。これは Eaton によれば、矛盾だと思われる。しかし、私の考えでは、不道徳を称賛しないことと(without endorsing [immorality])と道徳的悪さを最小化することと(minimize moral failing)はまさに共存できる概念である。道徳的悪がもたらす嫌悪感を最小化することはいかなる状況でも道徳的悪を称賛することまで導かない。何故なら、前者はただのマイナスを減らすことで、後者はプラスになることであり、前者の最大限はゼロで、後者の最低限はゼロ以上にある。さらに、Carrol が不道徳的なキャラクターに鑑賞者たちの好感をもたせるというタスクの難しさに投げかけてきた疑問に対して、Eaton は良いキャラクターの創造にある困難を例として挙げたが、私の考えでは、良いキャラクターの創造にある難しさは Eaton が言う不道徳のかつ魅力的な主人公の創造とは全く別の問題である。何故なら、不道徳のかつ魅力的な主人公も下手に作られたキャラクターになることも可能である。したがって、Eaton の説明は不十分であることになる。

また Ted Nannicelli と Scott Woodcock は不道徳的なジョークなどを含む喜劇作品に基づいて不道徳主義を支持する新しい支点を作ろうとしている。彼らの論証の問題点は主に挙げられた例にある。Nannicelli は作品の創造過程の不道徳さに着目し、映画作品に出演する俳優たちに悪い影響を与えるという道徳的な悪さが作品の美的に優れている効果にとって必要である、と主張する。しかし、私の考えによれば、結果によって道徳の善さ或いは悪さを判断することはまさに規範倫理学領域内にある結果主義に対してしばしばなされている批判を引き起こす。すなわち、結果の良さ或いは悪さは時間によって、変化しやすいゆえ、判断しにくい。Woodcock は相対主義に依拠して、不道徳主義が存在可能なスペースを作ろうとしているが、彼が挙げた一番重要な例において、不道徳自体こそが美的メリットになる原因だということうまく説明できなかった、と私は考えている。

今までの不道徳主義を支持する学者たちはすべて問題含みの論証を用いているうえ、Panoë Paris は不道徳と美的メリットの間に強い繋がりを作ることを全般的に否定している。私は不道徳主義を支持する試みとして、少なくとも二つの場合で、不道徳が芸術的な表現手段として、作品の美的メリットに直接貢献することを主張したい。まず、悪行を行うことによって、キャラクターの強烈な感情、意志、能動性を表す際に、その表現力が一層強化される効果をもつゆえ、作品の美的メリットになる。なお、社会的な悪を批判するために、キャラクターの道徳的墮落を表現することは最も有効な手段である。道徳の行為規範領域での重要性が高いほど、上述の芸術的表現手段としての不道徳の効果は高くなる。そして、芸術的表現手段としての不道徳は決して Paris が言う偶然的かつ間接的な美的関連をもつわけではなく、必然的かつ直接的に作品の美的メリットになる、と私は主張する。

主要参考文献:

Eaton, A. W (2012), Robust Immoralism, *The Journal of Aesthetic and Art Criticism*.
Panoë, Paris (2019), The 'Moralism' in Immoralism: A Critique of Immoralism in Aesthetics, *British Journal of Aesthetics*.
Etc.